

〔論文〕

闇市を起源とする土橋市場の形成過程と継続要因に関する研究

大森洋子^{*1}

The Formation Process and Continuation Factors of Dobashi Market: Origins from a Black Market after World War II

Yoko OMORI

Abstract

Dobashi Market, which originated as a black market after World War II, is located in the precincts of a shrine. Markets that were originally black markets are changing their appearance nationwide; however, although Dobashi Market is renovated, it has been operating and maintained on almost the same site. This study clarifies the process and factors that have contributed to the maintenance of the market. The factors include the location of the Dobashi market, which is a special area within a shrine's precincts; the union organization that functioned to maintain the market; and the local residents' favorability toward the market.

Keywords: Black Market, Precincts of Dobashi Hachimangu Shrine, Dobashi Market, Yame City, Bar Area, Wooden Arcade

1. 研究の目的と方法

1-1 研究の背景と目的

八女市福島の中心市街地に立地する土橋八幡宮境内には、木造アーケードが架かる土橋市場という商店街が存在する。全国でも少なくなっている戦後の闇市を発祥とする商店街で、その珍しさから現在注目を浴びてきている。八女市でも中心市街地活性化を検討する中で土橋市場も重要な資源と位置づけている。この特徴的な土橋市場の今後の利活用を検討する資料とするため、設立から現在までの履歴と商店街としての特徴を明らかにし、闇市を起源とする商店街が区画整理等により消滅している中で、土橋市場が当時の姿を残しつつ現在まで維持されてきた要因を考察することを目的に研究を行った。

1-2 闇市に関する先行論文

闇市とは物資不足に対処するために行われた統制経済下で公的には禁止されていた流通経路を経た品が並んでいた市場と定義されている。戦時中にも闇市場、闇取引などという言葉はあり、流通そのものはあったが、実際に物の売買が行われる場として闇市が登場したのは戦後のことで全国的に広がった。闇市に関する論文は多数ある。主要な先行研究としては、松平による一連の研究⁽¹⁾があり、それまでマイナスのイメージが強かった「闇市」を「ヤミ市」と表記して、「庶民生活のエネルギーの源泉」と評価し、祭りに通じるような空間として位置づけている。初田ら⁽²⁾は全国規模で自治体史から闇市の成立・展開過程と行政の関与を明らかにしている。闇市の組織主体としては玄人の露天商が多く、中には暴力団組織の名前を付けていた事例も報告されている。闇市と呼ばれていたかどうかは不明であるが、自治体が公設や公認してできた市場でも闇取引が黙認で行われていたものや、警察が民間主体に成立を斡旋・要請した市場で闇取引が行われていたことが報告されている。ある程度黙認して市場で闇取引が行われていたようである。他に闇市から中心市街地の商店街へ発展した過程を明らかにした論文⁽³⁾がある。それらに対して、本稿では現在まで継続している闇市起源の商店街について、その存続の要因を明らかにすることに特徴がある。

1-3 研究の方法

研究は以下の方法で実施した。①土橋商店街の履歴を八女市史⁽⁴⁾や郷土史研究会が発刊する雑誌⁽⁵⁾、昔を知る古老や土橋市場組合へインタビューし把握する。②近年開業した店主へここでの開業の動機や今後の維持方針などをインタビューし、商店街のポテンシャルを明らかにする。③商店街の建物の特徴を明らかにするために、構造や階数、屋根形式、

^{*1} 建築・設備工学科
令和3年11月16日受理

外壁仕上げなどを調査する。同時に業種の特徴を明らかにするために用途調査を実施する。④以上の調査から、土橋市場の履歴と特徴を明らかにし、これまで維持されてきた理由を考察する。

2. 土橋市場の位置

2-1 土橋市場の位置

土橋市場は伝統家屋が並ぶ八女福島伝統的建造物群保存地区の東に隣接する西唐人町に位置する（図1参照）。東西に走る旧往還道と南北に走る旧国道3号線（昭和42年（1967）に市道荷稻五丁野線へ名称変更）が交わる交差点近くに立地する土橋八幡宮の境内に存在する。旧外堀の東外側となり、かつて外堀に土橋が架けられていたことから、この付近は土橋と呼ばれている。

旧国道3号線と東西に走る旧国道442号線（現県道96号線）が交わる土橋交差点から南側は、土橋通りと呼ばれているが、国道開通後商店が立ち並び賑わっていたことから銀座通りとも呼ばれている。土橋交差点から銀座通り一体は、映画館、旅館、百貨店の岩田屋八女店、パチンコ店、小売店舗、堀川バス本社等の事業所が集積し繁栄していた。

2-2 土橋八幡宮

土橋八幡宮は、旧国道3号線の東側の奥に立地し、北側と東側が路地に面し、2本の参道は南側の旧往還道と西側の旧国道3号線に接している。南側の参道が当初からのもので、鳥居、石橋、楼門を構える。西側の参道は旧3号線が明治18年に開通した後に造られたもので、鳥居のみが建っている。鳥居を潜った参道の奥の境内に土橋市場はある。土橋八幡宮は延暦3年（784）に宇佐八幡宮より分霊され旧稲富村・旧福島村境に創建された神社で、慶長6年（1601）の福島城築城の際に外堀に接するため現在地に移転された歴史のある神社で、両村の氏神で



Fig. 1 Dobashi intersection in 1955
百貨店の岩田屋や堀川バス本社が立地していた昭和30年の土橋交差点
(NPO まちづくりネット八女写真提供)

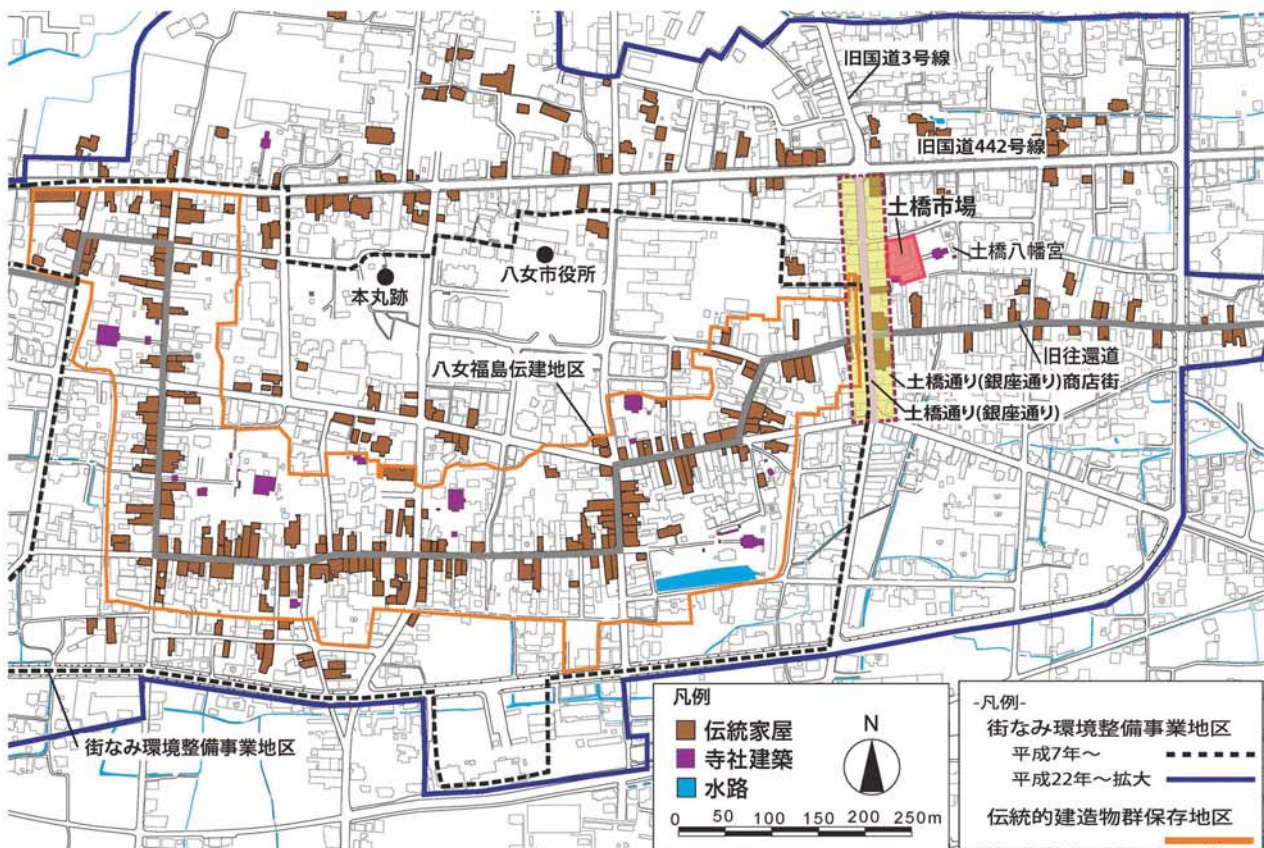


Fig. 2 Location of Dobashi Market and Dobashi Street (Ginza Street) 土橋市場と土橋通り（銀座通り）の位置

あった。現在の氏子は、新町、上稲富、下稲富、東唐人町、西唐人町、土橋の6町内会である。江戸時代より続く10月17日の神幸際は旧稲富村に残された御旅所まで御輿が旅立ち、2泊し還幸する。鐘や太鼓ドンドンカンカンと鳴らしながらお供が歩くので「どんどんかんかん」とも呼ばれ、現在も土橋八幡宮最大の祭事である。土橋市場組合は土橋八幡宮の神幸祭には氏子として参加するなど、協力をしている。

楼門が旧往還道に開いた参道正面に建ち、三間一戸の八脚門入母屋造本瓦葺きで文化8年（1811）の建築である。拝殿は入母屋造銅板葺きで明治中期の建築と言われ、正面を西に向ける。本殿は入母屋造銅板葺きで18世紀末の建築とみられている。この拝殿西側の境内敷地に木造アーケードの架かる土橋市場が広がる。



Fig.3 Worship Hall facing west.
西面する神社拝殿



Fig.4 Dobashi Market seen from the west approach. That is located behind the torii gate. 西側参道から見た土橋市場。鳥居の奥に土橋市場がある。



Fig.5 Dobashi Market seen from the southern approach. That market is located beyond the torii gate, stone bridge, and tower gate. 南側参道から見た土橋市場。鳥居、石橋、楼門の先に土橋市場がある。

3. 土橋市場の成立と変遷

3-1 土橋市場の誕生

戦後、日本各地に闇市が形成されたが、土橋でも銀座通りの店舗の軒先を借りて、満州、朝鮮、台湾、シンガポールなどの外地からの引揚者や失業者が露天の闇市を開いていた。これに対して進駐軍から撤去命令が出されたが、露店を出していた人々の生活を心配した警察署長から土橋八幡宮境内など空いている場所に店を開いたらという助言があり、露店の人たちは境内に店を構えることを希望した。それを知った当時福島劇場の経営者であったK氏が土橋八幡宮の宮総代会（氏子の代表者で構成される会）に交渉し八幡宮境内の西半分約400坪の土地の使用契約を仲介し、昭和21年（1946）5月に各自で間口1間半の平屋のバラック（簡易な木造建築）を建てて約70軒の店が開いた。その際、境内に店を構えることができるのは引揚者のみで、ここで利益が出て他の適当な場所が見つければ出て行くという約束がされた。殆どが住居も一緒であった。

当時は食料品、衣料品、日用雑貨まで生活用品が何でも揃っており賑わっていた。統制品を非合法で販売する店もあったが、ある程度黙認されていたようである。この境内の闇市を土橋市場と当時から呼んでいる。翌年の昭和22年4月には組合を設立し、以後土橋市場の管理は組合が行い、地代も各店舗から集めて宮総代会へ払うようになった。店舗を開業する際には営業権を組合から購入する必要がある。ここで言う営業権は建物を所有するか組合から借りて店舗を営業する権利のことである。出て行くときは更地に

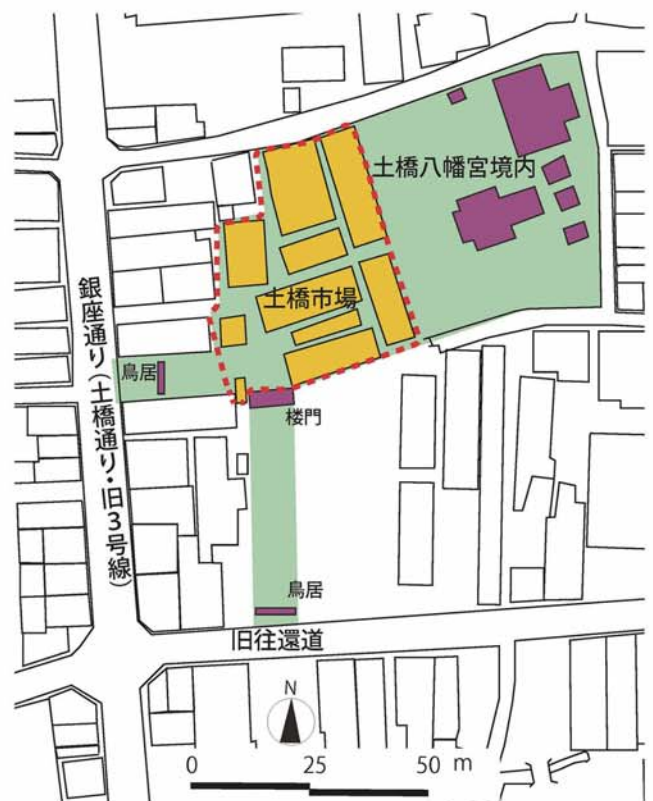


Fig. 6 Building layout at the time of the birth of Dobashi Market
土橋市場誕生時の建物配置

するという約束であったが、次の店舗開業者へ営業権と共に建物を転売する店が多かった。

3-2 高度経済成長期

昭和 30 年代の終わり頃には、近隣の立花町が蜜柑栽培で潤い飲み屋の需要が高まり、多くの店がスナックやバー、小料理屋など夜のみ営業する店に転業し、八女地方の一大飲み屋街⁽⁶⁾となった。また昭和 40 年にスーパーマーケットが土橋市場近くに開店し、市場内の小売店が廃業していったことも飲み屋街に変わっていった要因としてあげられる。この頃から 2 階建てに増改築する店が多くなった。また転居する時は組合を通して、まずは組合員に情報が提供され、隣の店が購入し店舗を拡大することが多かった。外部の人が購入する場合は組合で審査し一定の条軒をクリアすれば認められ組合員となり店舗を開くことができる。組合所有の建物もあり、組合が店子に貸したり、売る場合もある。

昭和 39 年に蠟燭の火が原因で大火があり、北側の 5 軒を焼失した。木造家屋の密集地であるため、火災を最も恐れ、各店舗から一人ずつ当番を出して二人 1 組となり、23 時から翌朝の夜明けまで拍子木をならして巡回した。この大火以降は小火が 2 軒程度で済んでいる。昭和 40 年代には市場内の路地に木造アーケードが架けられた。

3-3 平成時代

平成になると客足が減少し、約 20 年前に市役所近くの大亭料亭が閉店すると急に客足が途絶えた。料亭での宴会後の 2 次会に土橋市場のスナックを利用している客が多かったためである。一時は存亡の危機に瀕したが、市が平成 19 年に都市再生整備計画を策定し、平成 21 年にまちづくり交付金事業により、上下水道が敷設され徐々に盛り返してきた。ただ境内は飲料に適した水が出るため井戸水

Table 1 Chronology of activities related to the Dobashi market
土橋市場に関わる活動年表
(■土橋市場に直接関わる 出来事,
●都市空間に関わる出来事,
▲周辺の大型店舗の開閉店)

和暦	西暦	出来事
延暦3年	784年	■福島村と稲富村の村人により宇佐八幡宮の分霊により土橋八幡宮を創建
慶長6年	1601年	■福島城築城の際、社殿が城の堀に接していたため現在の地に移築
明治18年	1885年	●久留米-熊本間の国道3号線(現土橋通り)が土橋を通る
大正3年	1914年	●久留米-福島間を三井電車が開通
大正9年	1920年	■土橋八幡宮の西側(国道3号線)に鳥居を建設
昭和21年5月	1946年	■土橋市場設立
昭和22年4月	1946年	■土橋市場組合設立
昭和22年6月	1947年	▲福島岩田屋 開店
昭和25年	1950年	●福島銀座通り商店街が発足
昭和33年	1958年	●三井電車廃止
昭和35年	1960年	●福島銀座通り商店街が土橋商店連盟に変更
昭和39年7月	1964年	●土橋通りで毎月第一土曜日に土曜夜市開始
昭和40年10月	1965年	▲スーパー日の出屋 開店
昭和42年	1967年	●国道3号バイパスが完成
昭和51年	1976年	▲寿屋 開店
昭和52年	1977年	▲福島岩田屋 閉店
昭和52年	1977年	▲アコープ八女店 開店
昭和53年9月	1978年	▲サニー 開店
平成元年	1989年	▲アコープ稲富店 開店
平成9年11月	1997年	▲暮らし館 開店
平成12年10月	2000年	▲ゆめタウン 開店
平成13年7月	2001年	▲日の出屋 閉店
平成14年1月	2002年	▲寿屋 閉店
平成14年10月	2002年	●土橋通り下水道幹線工事完成
平成19年	2007年	■市は土橋市場も対象の都市再生整備計画を作成
平成19年9月	2007年	●土橋公民館下水道工事完成
平成20年	2008年	▲アコープ稲富店 閉店
平成21年3月	2009年	▲サニー 閉店
平成21年	2009年	●市は土橋商店街整備について活性化検討委員会を発足
平成22年	2010年	■土橋市場路地、公衆トイレ改修工事が完成
平成23年	2011年	●土橋通りのカマボコ状の道路の改修工事決定
平成23年9月	2011年	●土橋公民館玄関に防犯灯設置
平成23年11月	2011年	●土橋通り南半分の舗装改修工事了
平成24年	2012年	●トラス八女(マンション)地元説明会、翌年完成
平成24年3月	2012年	●土橋通り北半分の舗装改修工事了、同時に土橋通りの街灯改修工事も完了



Fig. 7 Ginza-dori around 1970.
昭和 40 年代の銀座通り
(NPO まちづくりネット八女写真提供)



Fig. 8 Dobashi market with many bars
飲み屋が多い土橋市場



Fig. 9 Approach the shrine through the arcade. アーケードを通して神社にアプローチする

(6) この論文では小料理屋、居酒屋、スナック、バーなど主に酒を提供し夜に営業している店を飲み屋と呼称する。

を使用している店舗が多く、水道を使用しているのは現在でも数軒程度である。店舗の拡大が進み、当初 70 軒であった家屋は 29 軒となっている。市場全体の建築面積は最初と変わらないが、1 軒の面積が大きくなっている。空き家が 7 軒ある。

4. 土橋市場組合

4-1 土橋市場組合の組織

土橋市場の運営をしているのが土橋市場組合である。昭和 22 年 4 月に設立された土橋市場組合は、市場内の店舗全てが加入している。前述のように組合員でないと営業権が与えられない。営業権は建物の使用権とセットであり、建物は店主所有の場合と組合所有の場合がある。店舗所有者が転出する場合は、次の転入者へ建物を売却するか賃貸にするか、あるいは組合へ無償譲渡するかのどれかとなる。外部から新規に開業する場合は、組合が資格審査を行い許可された者だけが加入し開業できる。店舗を閉鎖する時も届けが必要である。

役員は組合長 1 名、会計 1 名、幹事若干名、監査役 2 名、任期は 2 年で、組合員の選挙で選んでいたが、組合員が減少したことから現在は話し合いで決めている。組合加入金は 1 万円、会費は月 1 万円である。会費で組合の運営や市場の維持管理を行っている。最近では防犯カメラの設置を行った。地代は各店舗から組合が徴収し、一括して宮総代会へ支払う。約 400 坪で年間約 62 万円を納めている。

4-2 土橋市場組合の建物に関する規約

バラックから始まった建物を増改築しながら発展してきた為、建築基準法上の建築確認を受けていないが、建物に対しては組合で内規を定めている。階数は 2 階建てまでとなっており、これは昭和 33 年 11 月 29 日に土木事務所（現在は県土整備事務所と名称改称）の勧告により組合の臨時総会で決定し、土木事務所に誓約書が提出されている。更に昭和 40 年 3 月 5 日には土木事務所の勧告により増改築時には隣との界壁は防火処置を施すことが決定されている。外観に関わる増改築工事は図面を組合に提出し許可が必要である。火災が最も恐れられており、防犯カメラが付けられた現在は当番による夜警はないが、暖房及び家事一般には石油・その他燃料用油類の使用は禁止され、神仏灯明には蠟燭を禁止し電気類を用いること、家屋には消防法に規定された消火機器を必ず設置すること、及び火災保険に加入しないと営業ができないことが組合内規で決められている。

5. 土橋市場の店舗の現状

5-1 店舗の業種

土橋市場を含む銀座通りの商店街は、昭和 40 年から近くにスーパーが出店したことから年々客が減少し、閉鎖する店舗が増えていった。現在は若者が経営する店舗が若干増えてきている状況である。調査した 154 物軒の業種は、飲み屋が 16.9% (26 軒)、日用雑貨が 9.1% (14 軒)、食堂が 7.8% (12 軒)、美容室が 3.9% (6 軒)、服・クリーニング店も 3.9% (6 軒)、医療系が 3.2% (5 軒)、事務所が 2.6% (4 軒)、パン・菓子類が 1.9% (3 軒)、食品販売（魚、肉、油）も 1.9% (3 軒)、メガネ・時計・宝石類が 0.6% (1 軒) と様々な店が所在しており生活必需品が揃っている。

土橋市場の建物 29 軒（組合事務所も含む）の内、空き家 7 軒と専用住宅 1 軒を除く 20 店舗の業種は、飲み屋が 9 軒 (31.0%) と主にスナック等の夜に営業する店が多かった。その他に食堂が 4 軒、日用雑貨が 4 軒、パン屋、美容室、宝飾店、事務所（組合事務所）が 1 軒ずつであった。一大飲み屋街であった名残りがうかがえる。飲み屋以外のパン屋、雑貨、宝飾店などは最近若者が開業した店舗

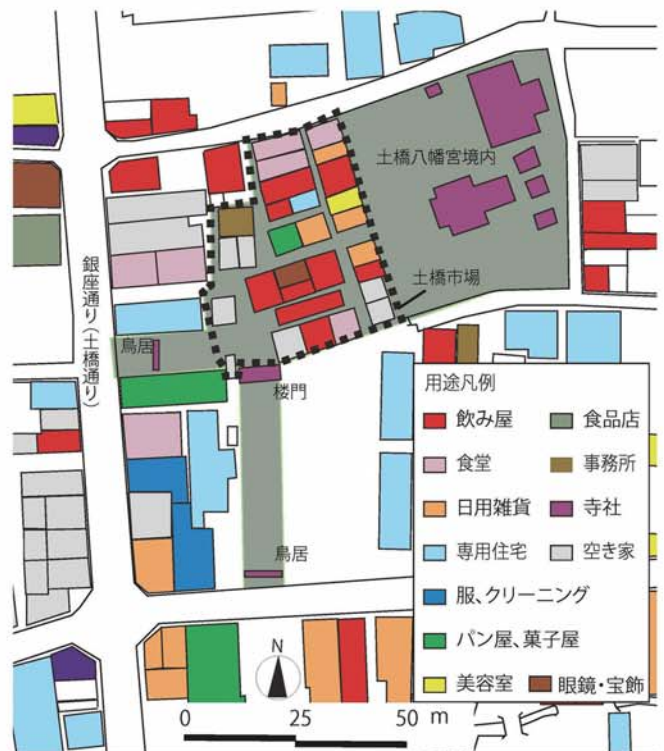


Fig. 10 Distribution of buildings by use in and around Dobashi Market
土橋市場と周辺の用途別建物分布図

である。ただ新型コロナの影響で2021年9月現在は休業したり、移転を予定している店舗もある。

5-2 建物の構造・規模・外観

土橋市場内の建物は全て木造2階建てで、かつては1階が店舗、2階が住居として使用されていたが、現在居住しているのは5軒だけである。屋根の形状は全て切妻で、屋根の材料は金属が27軒、瓦が2軒、外壁は全て大壁でモルタル塗りが23軒、耐火ボード貼りが6軒である。当初はあくまでも一時的な建物でいつでも撤去できるように簡易な材料で造られたが、撤去されることなく年々増改築が繰り返され一般家屋と変わりなく耐火性能が要求されるようになっていく。都市計画の用途は商業地域の準防火地域である。木造のアーケードの屋根は透明プラスチック板である。建物に関しては前述のように土木事務所の指導により階数や外装材の制限がされている。

6. 土橋市場の商業地としての位置づけ

土橋市場の商業地としての価値を把握するために、ここで営業している事業主にインタビューを行った。当初から続いている1店舗と最近開業の4店舗の結果を以下に記述する。当初からの店舗は住まいも一緒であるが、他は全て店舗のみで、住まいは市場外にある。ただ、インタビューしたのが新型コロナ感染拡大前であり、現在は休業している店舗もある。

(1) スナック経営 (60代女性)

両親が満州からの引揚者で、祖母の実家近くであったことからここで両親が店を開いた。最初は菓子小売り、次に菓子問屋、昭和42年(1967)には小料理屋、昭和57年(1982)からはスナックと業種を変え今日に至っている。現経営者はここで育ち母親の跡を継いで現在も営業をしている。土橋市場の雰囲気が好きで将来まで続くことを願っている。

(2) パン屋経営 (20代男性, 平成27年8月開業)

土橋八幡宮近隣の出身で、東京のホテルでパンの修行をしていた。隣の雑貨屋の紹介で家賃が安いこともありここで開業することとなった。前使用者がカフェを営業していたためそのまま利用でき、ペンキを自分で塗っただけで殆ど改修する必要がなく、オープンを購入した程度で平成27年(2015)8月に開業できた。ネット販売が好調で、店舗は常連客の利用が多い。佐賀県から訪れる客もいる。ここは若い頃遊んだ親しみのある場所ではあるが、将来は人通りの多い場所に移転したいと考えている。

(3) 雑貨店経営 (40代女性, 平成24年開業)

八女市黒木町の出身で、美容院や保険会社で働いたが、自分の好きな物を販売したいと考え平成24年(2012)に開業した。客は福岡、熊本、大分、長崎など近隣の様々な県から訪れる。この場所は友人の紹介で見に来て、雰囲気が気に入って選んだ。開業にあたっては、自分達で改修したため費用は約40万円であった。将来もこの場所にいる予定である。

(4) 宝飾店 (アクセサリ製造販売) (40代男性, 平成30年12月開業)

八女市吉田の出身で、鉄骨を扱う建設会社で働いていたが、38歳の頃にジュエリー製作の専門学校に行きアクセサリを製作し販売をしている。鉄筋を加工した大型のオブジェも商品として並んでいる。2階を作業場としている。この場所はゲームセンターや駄菓子屋がある頃から知っており、知人の紹介で家賃が安いことから選んだ。土橋市場の雰囲気は気に入っている。建設会社で働いていたので、開業のための店舗の改修工事は自分で行った。まだ平成30年(2018)年12月に開業したばかりなので今後どうするかは全く考えていない。

(5) 飲食店経営 (30代男性, 平成27年9月開業)

八女市立花町出身で、以前は八女市内の国道沿いのプレハブでたこ焼き屋をしていたが売り上げが良くなく移転を考

Table 2 Number of Buildings by Use in Dobashi Market
土橋市場の用途別建物数

用途	軒数	割合
飲み屋	9	31.0%
空き家	7	24.1%
食堂	4	13.8%
日用雑貨	4	13.8%
パン屋	1	3.4%
宝飾店	1	3.4%
事務所	1	3.4%
美容室	1	3.4%
専用住宅	1	3.4%
計	29	100.0%



Fig. 11 Dobashi market is attracting an increasing number of young people to open businesses.
若者の開業も増えている土橋市場

えていた。カフェをしていた前使用者と知り合いで、店舗の内装の状態が良く少ししか手を加える必要がなかったので移転を決めた。改修費用は殆どかかっていないが、プロパンガスから都市ガスに変わり厨房機器の買い換えに100万程度かかった。昼間は中高生の客が多く、夜は飲み屋帰りの客が多い。土橋市場のレトロな雰囲気が入りに入り、他への移転は考えていない。

(6) 土橋市場の商業地としての位置づけ

土橋市場は他の場所で営業するまでの一時的な店舗ということで発足し、経営者の転出入が多いが、市場の創建時から業種を変更しながら続いている店舗もある。その人にとっては故郷の空間となっている。最近若者が多く開業している。いずれも八女市内出身の若者で、土橋市場のレトロな雰囲気が気に入り開業している。家賃が安いのも魅力である。いずれ大通りに出店したいと希望する店主もいるが、殆どはここで続けたいと希望している。中心市街地で交通の便が良く家賃が安いことから、空家になっても転入希望者が見つかりやすい。

7. 結論

以上のように土橋市場の設立から現在までの経緯を明らかにした。終戦時の引揚者のために地元有力者の計らいで由緒ある土橋八幡宮の境内に闇市として設立されたのが土橋市場の始まりで、最初はある程度生活の目処が立ったら移転するという約束で間口1間半の平屋建ての簡易な建物が並んだ。その後移転しても次に転入する人がおり、建物は撤去されることなく増改築が繰り返され今日に至っている。高度経済成長期は飲み屋街として盛況であった。平成になり空き家が目立ち始めたが、最近は家賃の安さと古い木造家屋が木造アーケードの中に並ぶという特徴的な雰囲気を気に入り、若者が雑貨屋、パン屋、アクセサリー店など昼間の店を開業している。

今日まで土橋市場が存続している要因としては、以下のことが考えられる。

- ①八女市が地方都市であり、中心市街地であっても開発圧力が少なく、区画整理などの開発は行われなかった。
- ②神社境内に立地しているため開発業者が入り込みにくい。神社という神聖な場所ということもあるが、土地の売買や賃貸は神社の宮総代会と交渉することとなり、話がまとまりにくい。
- ③中心市街地に立地し交通の便が良かったため、転出する人がいても次に転入する人がいて建物が維持されてきた。
- ④飲み屋街として繁盛したときに地元の人に愛されていた。
- ⑤組合がしっかりと機能し、土橋市場の管理を行っている。必ず組合の資格審査を受けないと開業できない仕組みになっている。また、神社の祭りには氏子として参加するなど宮総代会との関係も良好である。

戦後の闇市から発展した商店街が神社境内にあるという特徴から、最近は雑誌やSNSで土橋市場が取り上げられ八女市外から客が訪れている。八女市観光課でも土橋市場のバル巡りを企画し人気のあるイベントとなっている。家賃が安いことから若者の新規開業も増えている。これまでとは異なる業種の店が増えていく可能性もあり、土橋市場は八女市の重要な観光資源ともなり得る。

【参考文献】

- (1) 松平誠「ヤミ市 東京池袋」ドメス出版、1985年、及び「ヤミ市 幻のガイドブック」筑摩書房、1995年などがある。
- (2) 初田香成、村上しほり、石樽督和「第二次大戦後の闇市の全国的な成立・展開と行政の関与」日本建築学会計画系論文集 第82巻、733号、pp.805-815、2017年3月
- (3) 村上しほり「三宮地区「三宮国際マーケット」の形成と変容過程について—戦後神戸におけるヤミ市と市街地形成に関する史的探究」、日本建築学会計画系論文集 第78巻、693号、pp.2433-2438、2013年11月
- (4) 八女市史編さん専門委員会編「八女市史上巻・下巻」八女市、1992年
- (5) 椎窓孟編「会誌 黄櫨第42号」人生史サークル黄櫨の会、2011年